

『牡丹灯籠』の旅——中国、日本、ベトナム』に参加して

千野明日香(法政大学)

「牡丹灯籠」のような中国の古典説話(原文では「牡丹灯記」)が、どのような形で世界各地に伝わっているのか興味を持ち、今回コメンテーターとして参加させていただいた。当日は、イタリア、ベトナム、台湾から来られた先生方が発表をされた。以下に、会場での発表内容とそのまとめを記してみる。

イタリアのマティルデ・マストランジェロ氏は、ヨーロッパでの「牡丹灯籠」の翻訳史を発表された。氏によると、欧州ではまだ「牡丹灯記」の中国の原典からの翻訳が存在しない。欧州で知られるのは小泉八雲の英文の著作(「宿世の恋」遠田勝の訳語)であり、その八雲が発想を得たのは、三遊亭円朝の落語「怪談牡丹燈籠」に基づく歌舞伎の舞台だったという。

「カランコロン」という駒下駄の音は、日本では「牡丹灯籠」の代名詞のようなものだが、これは円朝が落語化するさいに付け加えた擬音語である。小泉八雲はそれを踏襲したにすぎない。しかし氏は、「牡丹灯籠」で好きなのは幽霊の登場する擬音語の場面だと言っておられた。

氏は「カランコロン」のイタリア語訳に苦労されたということだが、もともと中国語の原典に擬音はない。それは偶然ではなくて、おそらく文化的な背景や、言語的な背景があつてのことだ。例えば、小泉八雲の著作を中国語に翻訳するとしても、同様に困難が予想される。まず、中国では木の履物が一般的ではない。皆無というわけではなくて、広東省では下駄に当たる履物をはくが、これで歩くときに発する音は、「咯嗒」(gedageda・ガダガダ)などと表現される。しかし、使える擬音語はほぼこれのみで、他に置き換えられるような適当な擬音語が見当たらない。「カランコロン」という擬音によって幽霊への恐怖感が突然立ち上がるのは、日本語独特の効果なのかもしれない。各国の「牡丹灯籠」では幽霊の気配がどのように表現されるのか、改めて知りたくなった。

ベトナムのドアン・レー・ザン氏は、中国の「牡丹灯記」とベトナムの「木綿樹伝」の相違点について発表された。氏の解説によると、木綿樹とはベトナムにしかない樹木で、聖性を持ち、寺などに植えられるという。その名を冠した題名が示すように、「木綿樹伝」にはベトナムの地域的な特徴が強く出ている。女の幽霊は、夜ではなく昼間の市場に出てきて男を誘う。昼間に現れるから、灯籠も出てこない。にぎやかな市場の物音を背景に現れるので、「カランコロン」に当たる擬音もない。日本の物語とのコントラストが、とてもユニークに感じられた。

しかも、男は女の正体が幽霊だと知りつつ、柩を抱いて後追い心中をする。(「柩を抱く」という動作は、ベトナムでは葬式を意味するという)。中国には、筋がシェークスピアの「ロミオとジュリエット」に似た男女の悲恋心中譚の口頭伝承が古くから数多く伝わる。結末から見て、「木綿樹伝」はそれらの口承の心中譚に近いような印象を

受けた。

台湾の許麗芳氏は、原文の「牡丹灯記」とその影響下にある各国の伝奇小説研究の概要を発表された。論点は各国の伝奇小説作者の創作方法及び創作意識についてであった。氏によれば、各国の作者たちの創作方法は中国と異ならず、創作意識にも違いは見られないという。

筆者はコメンテーターの立場から、中国では「小説」は本来取るに足らない話という意味で、フィクションは伝統的に二流の読み物としか見なされてこなかったこと、日本ではむしろフィクションを重んじる伝統があることを述べ、日本の作者の創作意識は中国よりもかなり真剣であった可能性が強いという内容の発言をさせていただいたが、氏のお考えに変化は無いという答えであった。

国際会議であるため通訳が必須で時間的な制約が強かった上、三氏の発表内容が多岐にわたったこと、コメンテーターの力量不足などから、内容を理解するのがせいっぱいで、丁々発止の意見交換までには至らなかったことは残念に思う。

ただ、「物語の旅」という点から考えるなら、三氏の発表内容から、その道筋はかなりはっきり描けるように思った。

中国と距離的に近い日本やベトナムには、書物の形で原文の「牡丹灯記」が伝わる。異なる文化風土により各国で内容は変化するが、そのままでは原文も含めて欧州など距離的に遠い地域に伝わる喚起力は無かった。

この説話が欧州まで旅するようになったきっかけは、おそらく円朝によって付け加えられた「カランコロン」という擬音の表現力ではないだろうか。

中国の「牡丹灯記」中で幽霊が現れる場面は、ひたすら静謐である。人通りの途絶えた真夜中、冬の月のもと、着飾った十七、八の絶世の美女が「嫋嫋」（風にも耐えぬふぜいで）と男の前を横切っていく。ほっそりした纏足の美女が、つつましやかに歩むさまが想像させられるが、聴覚的な喚起力は持たない。

「木綿樹伝」の幽霊の登場する場面にも音がないことはすでに述べたが、この物語は、ベトナムでは知られた話とはいええないという。そして日本でも、円朝の落語化以前は「牡丹灯籠」が突出して知られることはなかった。聴覚的な喚起力の不在が、物語の伝播を難しくした一因であったように思われてならない。

だが、円朝のつけくわえた擬音は明治の聴衆に広く受け入れられ、八雲もそれを取り入れた。その「カランコロン」という響きとともに、物語は海を越え遠く欧州まで渡ることになったのである。

こうしたことを考えたのは、会に参加して、国際的な場でなければ聞くことのできないお話を伺ったおかげである。これまで意識していなかった点に気づくことができ、貴重な経験をさせていただいた。会にお招きいただいたことに感謝の意を表したい。